

近い将来、脳腫瘍が不治の病でなくなる

文 濱元 誠栄

text by Seiei Hamamoto

7 がんに悩むすべての方へ

脳腫瘍にどのようなイメージをお持ちでしょうか。ドラマや映画で登場人物が脳腫瘍になることがあります。だいたいは闘病の末に亡くなってしまいます。その影響か、「脳腫瘍＝不治の病」のようなイメージを持たれがちです。では、実際のところ、どうなのでしょう。

脳腫瘍にも良性と悪性があります。良性的な場合は、完全に切り切ることが出来れば、手術だけで完治が見込めます。悪性的な場合は、手術に加え、抗がん剤や放射線などを併用しても、完治が難しく、最も悪性度が高いグリオーマ（神経膠腫）では、5年生存率が10%前後と低く、不治の病に近いといえます。

なぜ、悪性の脳腫瘍は、このように予後が悪いのか、それには2つの理由があります。

まず悪性的な場合、画像では確認出来なくても、細胞の単位で正常な脳組織へ食い込んでしまっているため、見える範囲で切り切れたとしても残ってしまう可能性があります。腫瘍より大きめに余裕を持って切除すれば大丈夫なのではと思うかもしれませんが、脳は

生命の維持や様々な機能と密接にかかわっています。手術する範囲としては安全域があり、そこを越えて切除してしまうと、重度の麻痺やけいれんが残ったり、意識が戻らなくなったりするなどの後遺症の可能性もあります。脳腫瘍を取り切ったとしても、意識が戻らなくなったら、何のために手術をしたのか分かりません。そのため、脳腫瘍が出来た場所によっては腫瘍を残す前提で、手術を行います。

もうひとつの理由として、脳腫瘍は抗がん剤や放射線が効きにくく、手術で取り残してしまった場合や再発した場合には、基本的には根治は望めません。

そんな脳腫瘍ですが、新たな治療としてウイルスに大きな期待が寄せられています。技術が進歩し、ウイルスの遺伝子を改変することで、ヒトのがん細胞の増殖させることが実現しています。これに患者さんご自身を感染させることで、がん細胞だけを破壊しようという治療です。

脳は重要な部位なので、血液脳関門といって異物が血液によって運ばれてこない仕組みがあり、抗がん剤などの

化学療法は効果が出にくくなります。決め手となる治療がない中、このウイルスによる治療への期待は大きく、まだ臨床試験中ではありますが、再発したグリオーマの1年生存率が15%から何と93%にまで改善したという結果が出ています。この治療法が普及すれば、将来的には脳腫瘍とて不治の病ではなくなるかもしれません。

Profile

沖縄県宮古島出身。2001年、鹿児島大学医学部卒業後、沖縄県立中部病院、杏林大学医学部、茨城県地域がんセンター、沖縄県立宮古病院、宮古島徳洲会病院を経て、がん治療・再生医療の道へ。2018年、銀座みやこクリニックを開業し、がん患者へのセカンド・オピニオン、遺伝子治療や免疫治療を行っている。日本外科学会専門医、日本形成外科学会、日本癌治療学会、日本再生医療学会認定医、日本禁煙学会指導医。著書に「がんよろず相談室 [20のエピソード]」（医事出版社）。

銀座みやこクリニック 東京都中央区銀座3丁目10-15
東銀2ビル6階
03-6228-4112 <https://gmcl.jp>

